



# 日本学士院ニュースレター

明六社だより

## トピックス：

- 第101回日本学士院賞受賞者から寄稿いただきました
- 本院の歴史を紹介するコーナー「学士院の歩み」をはじめます
- 第6回日韓学術フォーラムを開催しました
- 秋の公開講演会を開催します



### 帝国学士院会館(旧日本学士院会館)

大正15年(1926)9月落成。鉄筋コンクリート造。外壁は花崗岩貼付。当初文部省建築課において設計起工したが、営繕管財局へ移管され、設計変更された。上野公園内の現在の日本学士院会館と同じ場所に建てられた。昭和2年(1927)からは、この新会館で授賞式が行われるようになった。昭和49年(1974)5月に現在の日本学士院会館が建設されるまで、授賞式や年10回の例会の他、日本学術会議や日本学術振興会の事務所としても使用された。

## 目次：

|                |   |              |    |
|----------------|---|--------------|----|
| 第101回日本学士院賞授賞式 | 2 | その他の講演会のお知らせ | 9  |
| 学士院の歩み         | 5 | 会員寄稿         | 10 |
| 所蔵資料の紹介(算木・算盤) | 6 | 外国アカデミー等との交流 | 11 |
| 講演会レポート        | 7 | 会館施設の利用案内    | 11 |
| 第6回日韓学術フォーラム   | 7 | 会員の逝去        | 12 |
| 第55回公開講演会のお知らせ | 8 | 会員の著書紹介      | 12 |
|                |   | 編集後記         | 12 |



## 第101回日本学士院賞授賞式

天皇皇后両陛下の行幸啓を仰ぎ、日本学士院第101回授賞式を平成23年6月20日(月)に日本学士院会館(東京・上野公園)で挙行了しました。本年は、恩賜賞・日本学士院賞2件、日本学士院賞7件、計9件9名の方々に授賞しました。

### 一 恩賜賞・日本学士院賞一

佐竹 明 (広島大学名誉教授、フェリス女学院大学名誉教授)  
宮田 秀明 (東京大学大学院工学系研究科教授)

### 一 日本学士院賞一

庄垣内 正弘 (京都産業大学客員教授、京都大学名誉教授)  
佐藤 恒雄 (広島女学院大学文学部教授、香川大学名誉教授)  
木庭 顕 (東京大学大学院法学政治学研究科教授)  
望月 拓郎 (京都大学数理解析研究所准教授)  
廣瀬 敬 (東京工業大学大学院理工学研究科教授)  
谷口 直之 ((独)理化学研究所基幹研究所グループディレクター、  
大阪大学産業科学研究所招へい教授、  
北海道医療大学客員教授、大阪大学名誉教授)  
宮園 浩平 (東京大学大学院医学系研究科教授・研究科長・医学部長)



受賞者と学士院会員



両陛下をお迎えする受賞者



第101回受賞者と文部科学副大臣、日本学士院役員



授賞式の様子



## 受賞者から…授賞式を終えての思い！！

〈恩賜賞・日本学士院賞を受賞して〉

佐竹 明



院長から賞を受ける佐竹受賞者



研究展示の前で佐竹受賞者と令夫人

今回恩賜賞・日本学士院賞をいただくことが出来、大変光栄に存じております。授賞に至るまでの選考の過程で、とくに私の著作に丹念に目を通すなどして、審査の任に当たって下さった日本学士院会員の方々のご苦勞に、心から感謝申し上げます。

受賞の対象となりましたのは新約聖書の中の一文書『ヨハネの黙示録』に関する研究でありました。キリスト教の伝統の短いわが国では、いわゆるキリスト教国である欧米諸国と違い、新約聖書研究の歴史はさほど長くなく、それに従事する研究者の数も多いとは言えませんが、それでも欧米の学界から注目されている優れた研究者が何人もおられます。その中であって私が受賞の栄に浴したのには多分に僥倖であったという思いが致します。それだけに、これを機会に一層研究に励むことにしたいと思います。

『ヨハネの黙示録』は、義しい人間が現在の苦難から解放される世界の終末が間近に迫りつつあるとの意識のもと、

その終末に直前する時期に起こる混乱、災害の数々を具体的に述べている文書であり、後世に、とくに苦難の中にある人々、何らかの危機感をもって生きている人々に、大きな影響を及ぼして来ました。それと共に、その記述内容に対する誤解、曲解もたくさん生まれています。他愛のない一例ですが、終末と世紀末とを重ね合わせる俗信が古くからありました。それが二十世紀末にも繰り返され、日本のような非キリスト教国でも書店に何種類もの『何々の黙示録』という書物が並びました。まさか学問の世界はそんなことと無縁だろうと思っていましたが、この時期には『ヨハネの黙示録』に関するまじめな研究が欧米諸国で集中的にたくさん発表されました。私の研究は原典を一字一句丹念に読み解くことが主たる内容ですが、それに際しては現代の研究業績と真剣に向き合うことも必要であります。このような業績多産の時期が研究の仕上げの時期と重なり、私にとっては「想定外」の苦勞となりました。



『ヨハネの黙示録 上巻・中巻・下巻』(現代新約注解全書)

綿密な釈義的作業に基礎づけられた、ヨハネ黙示録の本格的概論。中巻からは本文の注解が始まる。(新教出版社、2007～2009年発行)





## 〈恩賜賞・日本学士院賞を受賞して〉

宮田 秀明

このたび二つの賞を受賞いたしまして大変うれしく光栄であるとともに、大変身の引き締まる思いです。私自身自分が行ってきた研究開発活動にそこその自負は持っていましたが、本当に賞を頂き両陛下や院長先生以下の会員諸先生に温かく祝福して頂いたことも大変嬉しく思いました。

受賞理由になった研究は主に私が、30歳代に行ったものです。「船の波は線形分散波の典型例である」という研究社会の常識に対して、まだ若僧だった私が「船の波には非線形で衝撃波と同じ特性を持つ」と主張しました時は、ほとんど研究社会で村八分のような状態でした。進歩は革新によって実現していくはずですが、実際の現場では闘いのようなものがありました。

私の研究成果を最初に認めて下さったのは、学士院会員の乾先生とカリフォルニア大学のペーハウゼン教授でした。その次に、造船企業の設計者の方々が私の成果を認めて実際の船の設計に応用してくれました。創造的な研究を促す面から、学会の役割についてはもっと変化があってもいいのかもしれない。

受賞内容の研究以後、システム工学的な研究を中心にしながら、アメリカズカップのプロジェクトなどを行ってききましたが、今はこのシステム工学的な力を東北復興に生かすべく、多くの仲間と色々な活動を開始しています。受賞させて頂いたこともこの活動のエネルギー源にさせて頂きたいと思っています。



両陛下に研究内容を御説明する  
宮田受賞者



研究展示の前で宮田受賞者と令夫人

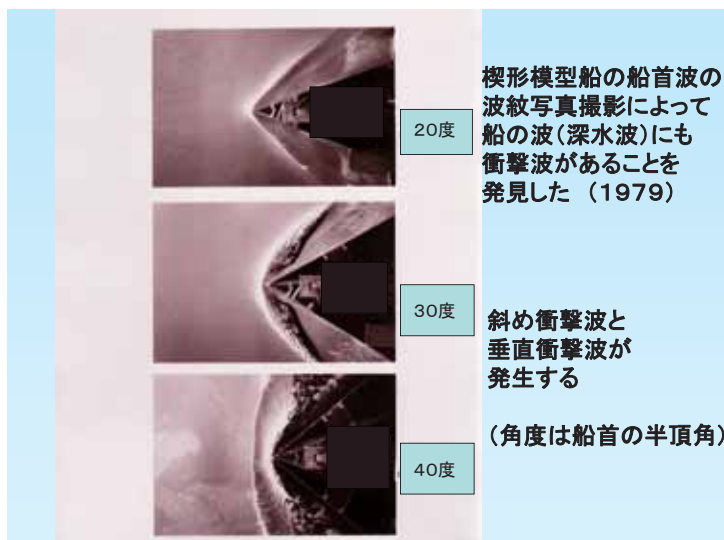


図1. 自由表面衝撃波の発見、船が衝撃波を作ること明らかにした。

発展型非線型方程式としての  
ナビエ・ストークス方程式を有限差分法・  
有限体積法で解く(波高の等高線)

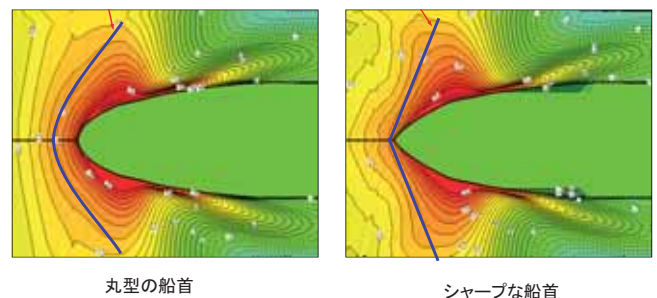


図2. 自然現象の正しい理解をコンピューター科学を使って、新しい船の設計法へ繋げた。

## 学士院の歩み(明治の新しいアカデミズム)

日本学士院は、明治6(1873)年に結成された近代的啓蒙学術団体である明六社を源流として明治12(1879)年に創設された東京学士会院を前身とします。東京学士会院は、明治39(1906)年に帝国学士院に改組し、昭和31年に現在の日本学士院の形となりました。

このコーナーでは、130年を超える本院の歴史についてシリーズで紹介します。第1回は「明治の新しいアカデミズム」です。

江戸幕府が倒壊し、新しい国家建設を始めた明治政府にとって、近代的学術制度の確立はもっとも大きなテーマの一つであった。

文部省は西洋学術の移植に力を入れ、海外に次々と留学生を派遣する一方で、海外から多くの教師や技師を招聘したり、旧幕府に奉職していた洋学者も官吏として登用している。また、欧米の学術書の翻訳を積極的に行い、啓蒙普及活動も熱心に行った。東京には、全国から先進的な知識人たちが集まり、新しい文化活動への機運は高まっていったのである。

明治6(1873)年、アメリカから帰国したばかりの26歳の森有禮(後に第一次伊藤博文内閣で初代文部大臣に就任)、45歳の“老学士”西村茂樹らが中心になり、福澤諭吉、西周らとともに明

六社を発足させる。明六社は、月2回の会合を開き講演を重ねるとともに、『明六雑誌』を発行し、自由な言論を展開した。この雑誌は新知識の源泉として多くの読者を得、学術雑誌の先駆となった。森がアメリカのソサエティを目指して発案した明六社は、日本で最初の知識人の自発的結社であり、学会でもあった。

ところが、明治7、8(1874、1875)年に最初の自由民権運動が高まりをみせると、政府は明治8(1875)年に讒謗律・新聞紙条例を実施し、言論への取り締まりを厳しくしていった。このような言論の自由への制約が強まる中で、『明六雑誌』は明治8(1875)年11月に刊行が停止され、明六社自体も自然解散する。しかし、彼らの志は東京学士会院へと受け継がれていくことになる。

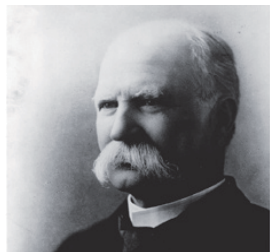
明六社解散と前後して、文部省内からヨーロッパに倣うアカデミー設立論が起こってくる。中心人物の一人は、文部大輔を務めた田中不二麿である。田中は、明治4(1871)年から6(1873)年にわたる岩倉遣外使節の一員として欧米各国の教育制度の調査にあたり、帰国後、調査結果を『理事功程』として出版している。この中では、フランスのアカデミーである Institut de France や Académie Française を「アンスチチュ」や「翰林院」として紹介している。

もう一人は、明治6(1873)年6月から文部省顧問・学監として招聘された米国人デイビッド・マレーである。『日本教育法』という建議書に付属する説明書の中で、マレーは「日本文学館」の設立を説いている。日本文学館は、「日本語学及文学に関する諸則を定めて其整頓を謀らんとする」ものであり、後日成立する東京学士会院より目的が限定されていたが、その組織構成は、東京学士会院設立の参考となるものであった。

明治11(1878)年11月、アカデミー設立の答申書(前文「呈翰林院規則草案」並びに「翰林院規則」)が、文部卿・西郷従道、文部大輔・田中不二麿、文部少輔・神田孝平宛に提出された。また、文部省がアカデミー設立のため欧米各国の制度を調査した結果が、『各国学士院紀略』としてまとめられ、公刊されている。

田中やマレーの構想が、どのように答申書に影響を与えたかは明らかではない。しかし、多くの文献が、田中とマレーの2人を学士院創設の功労者としている。

こうして作られた骨組みに明六社の中心メンバーが賛同し、東京学士会院が成立することになる。



・東京学士会院創設の功労者の田中不二麿(左)とデイビッド・マレー(右)

### 田中不二麿(1845－1909)

尾張藩士の家に生まれる。明治2(1869)年、大学校御用掛となり、明治4(1871)年文部大丞に任ぜられる。岩倉遣外使節に理事官として随行して欧米の教育制度を調査。明治7(1874)年に文部大輔となり、文部卿欠員中の文部省の実質的な最高責任者として教育令制定に尽力した。文部大輔辞任後は、司法卿や枢密顧問官などを歴任した。

### デイビッド・マレー David Murray(1830－1905)

北米出身の数学教授で、駐米代理公使当時の森有禮が、日本の将来の教育のあり方についてマレーの意見を求めた際に、森に感銘を与えたことが機縁となって、明治6(1873)年6月から文部省顧問・学監として招聘された。日本の教育改革に関する建議書を作成し、日本の近代教育制度の成立に大きく貢献。明治11(1878)年末に帰国した。



## 所蔵資料の紹介(算木・算盤)

伝統的な日本の数学である和算は、1603年に徳川家康(1543-1616)が征夷大將軍となり、徳川幕府を開いて以来、260年余り続いた江戸時代に大きな発展を遂げました。

このような日本独特の数学である和算は、専門家から男女を問わず素人、子どもまでに拡がり親しまれました。今回は、その江戸時代に用いられていた算木(さんぎ)、算盤(さんばん)について紹介します。

算木は、中国・漢時代の頃に原形があるとされる計算用道具で、宋・元の時代に発展して天元術と呼ばれるようになりました。中国ではそろばんの普及により、算木の解法は失われていきましたが、江戸時代の数学者はそろばんと並んで算木も使い、算木の造形を用いた筆算も開発されるなど、江戸時代を通じて世界のトップレベルにひけを取らない数学文化である和算の発展に貢献しました。

このコーナーでは、本院が所蔵する貴重図書・資料についてシリーズで紹介します。

第8回は和算資料の中から「算木・算盤」を取り上げます。



算木の数の表し方

| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---|---|---|---|---|
|   |   |   |   |   |
| 6 | 7 | 8 | 9 | 0 |
|   |   |   |   |   |

算盤の配置

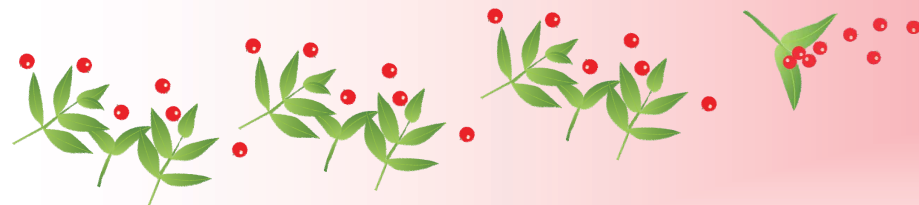
| 億   | 千     | 百    | 十    | 萬   | 千   | 百   | 十   | 商   | 分     | 釐     | 毫     | ← 解   |
|-----|-------|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-------|-------|-------|
|     |       |      |      |     |     |     |     | 實   |       |       |       | ← 定数項 |
|     |       |      |      |     |     |     |     | 法   |       |       |       | ← 1次  |
|     |       |      |      |     |     |     |     | 簾   |       |       |       | ← 2次  |
|     |       |      |      |     |     |     |     | 隅   |       |       |       | ← 3次  |
|     |       |      |      |     |     |     |     | 三乗  |       |       |       | ← 4次  |
|     |       |      |      |     |     |     |     | 四乗  |       |       |       | ← 5次  |
|     |       |      |      |     |     |     |     | 五乗  |       |       |       | ← 6次  |
| ↑   | ↑     | ↑    | ↑    | ↑   | ↑   | ↑   | ↑   | ↑   | ↑     | ↑     | ↑     |       |
| 億の位 | 一千万の位 | 百万の位 | 十万の位 | 万の位 | 千の位 | 百の位 | 十の位 | 一の位 | 小数点第一 | 小数点第二 | 小数点第三 |       |

算木は赤が正の数、黒が負の数を表し、幾つかの算木を組み合わせることにより1~9の数を表す(右上図参照)。算木は紙や木で作られた算盤の上に配置する。算盤の縦の列は字の書いてある列から左に1の位、10の位、100の位...を表し、横の行は上から解(答)、定数項(数字のみの項)、1次、2次、3次の項(変数が1乗・2乗・3乗)...を表す(右下図参照)。

解は、算木を違う桁に移したり足し引きすることによって求める。算木を使った計算では、単純な加減乗除だけでなく、変数を使った方程式に相当する問題まで扱うことができた(ただし変数は1つのみ)。

写真には、 $851x^2 - 3450x + 2691 = 0$ の方程式が表されている。





## 講演会レポート

### 第54回公開講演会

日時 平成23年5月28日

場所 松山大学8号館820番教室(松山市)



(上) 講演する石井会員

(下) 興味深い講演に聴き入る参加者

平成23年5月28日(土)に日本学士院第54回公開講演会を、松山大学の共催、愛媛大学の後援のもと、松山大学8号館820番教室において開催しました。

講師の石井寛治会員は「再考・維新経済史—国家・商人・民衆」と題し、和田光史会員は「土壌による炭素貯留と地球温暖化」と題してそれぞれ講演を行いました。

石井会員は、独特な攘夷のための開国路線を辿った日本の維新変革を見直し、それを経済面で支えた「商人的対応」の姿を、全国と愛媛の事例に則してわかりやすく解説しました。聴講者からは、「西欧諸国と同じようで違うやり方をして発展したのだと解った。」「商人の力を見直した。」等の感想が多く寄せられ好評を博しました。

和田会員は、土壌の有機物がCO<sub>2</sub>を大気から隔離・貯留することで地球温暖化を抑制する働きに注目した新しい研究を紹介しました。聴講者からは「資料がわかりやすかった。」「問題となっているトピックなので興味を持って聴けた。」等の声が聞かれ、講演終了後には熱心に質問をする学生の姿も見られました。

本講演会は13時に開会し16時10分に全ての日程を終了、盛会の裡に幕を下ろしました。

## 第6回日韓学術フォーラム



(上) 大韓民国学術院会館ロビーにて

(下) フォーラムの様相

大韓民国学術院との共同事業である第6回日韓学術フォーラムは、平成23年9月27日(火)～29日(木)にソウルにおいて開催されました。今回は本院より10名の会員が参加し、大韓民国学術院会員等を合わせて約100名の出席者がありました。

本院会員は、初日に韓国国立博物館での観覧後、大韓民国学術院を訪問し、役員や関係会員と和やかに懇談しました。2日目はソウル国立大学校内のコンベンション・センターでフォーラムが行われました。

報告1: 李成珪(大韓民国学術院会員)

「前近代東アジアの開と塞—10世紀以後を中心に—」

報告2: 斯波義信(日本学士院会員)

「日本における東アジア海域史の研究」

報告3: 朴相大(大韓民国学術院会員)

「韓国に於ける分子生物学研究の現状と展望」

報告4: 中西重忠(日本学士院会員)

「分子神経科学からシステム神経科学へ」

それぞれの報告において、活発な質疑応答が行われ、両国の会員が意見を交わしました。最終日は、ソウル国立大学校を訪問しました。

## 第55回公開講演会のお知らせ

平成23年10月22日(土)、第55回公開講演会を日本学士院会館において開催します。

久保田 淳会員は「文学と都市—上野・浅草を例として—」、杉村 隆会員は「医療と放射線」と題してそれぞれ講演を行います。

### 第55回公開講演会

日 時 平成23年10月22日(土)午後2時～5時10分

### 文学と都市

#### —上野・浅草を例として—

久保田 淳 会員

都市は時代が進むにつれて多くの人々を集め、さまざまな機能を持ちながら、発展を続けてゆく。そしてそこに繰り広げられる幾多の人生は、すべて文学の対象となりうるものである。そのような文学と都市の関係を、江戸・東京という歴史的都市の中でもきわめて特色を有するスポットである上野・浅草とその周辺を例に、考えてみたい。

この地域を背景とする文学作品はおびただしい数にのぼるが、今回は中世のいくつかの紀行文にはじまり、近世・近代の著名な作家・劇作家・詩人などの作品を取り上げて、彼等はこれらの土地のどのような機能に着目し、どんな人物の人生を描き出そうとしたのかを、時代を追って辿ってみたい。

### 医療と放射線

杉村 隆 会員

医療の各分野で放射線が使われている。胸部撮影、胃・大腸の二重造影、乳腺マンモグラフィー等はX線を使う。早期にがんを見つけて治療させる。短寿命の放射線同位元素を、がんに取り込ませ、そのガンマ線で診断するPET法もある。

がんの治療には放射線が効果を挙げる。がん組織のみに放射線が当たる素晴らしい機械が使われる。 $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 線を出す放射能同位元素も治療に使われる。がんのコバルト照射治療等の例がある。原子核の陽子／炭素を治療に使う陽子／重粒子線治療も、がんに卓効がある。

自然にも放射能のある原子は存在する。原子力発電事故で核分裂で生じた放射能物質による被曝は、出来るだけ避けたい。



※事前申込制・先着  
150名。  
お車での来場はご  
遠慮ください。

### お問い合わせ先

日本学士院 公開講演会係  
〒110-0007  
東京都台東区上野公園7-32  
TEL: 03-3822-2101  
FAX: 03-3822-2105  
E-mail: kouenkai@japan-acad.go.jp  
Web: <http://www.japan-acad.go.jp/>



## その他の講演会のお知らせ

平成23年10月以降に本院で開催を予定している講演会等をお知らせします。

日本学士院 E.J.Corey 客員来日記念講演会  
RIKEN Honorary Fellow 特別講演会  
Some Reflections on 60 Years of Teaching and Research

平成23年12月5日(月)午後2時30分～

イライアス・J・コーリー客員(ハーバード大学名誉教授)

イライアス・J・コーリー客員は、有機合成化学の分野で傑出した研究業績をあげ、「有機合成化学の近代化」を成し遂げました。1960年代まで、複雑な化合物の合成は閃きによる“芸術的な仕事”と言われていました。しかしコーリー客員は、それを合理的に進めるべく、革新的かつ“論理的な合成経路探索の原理(逆合成解析)”を提案しました。さらに、数々の斬新な発想で「論理」を持ち込むことによって、複雑な生物活性化合物の100を超える合成を極めて効率的に達成し、1990年にはノーベル化学賞を受賞しました。

今回は、コーリー客員の来日を記念して(独)理化学研究所との共催で、本院を会場に英語での記念講演を予定しています。

日本学士院学びのススメシリーズ  
講演テーマ「見えない巨人ー微生物ー」

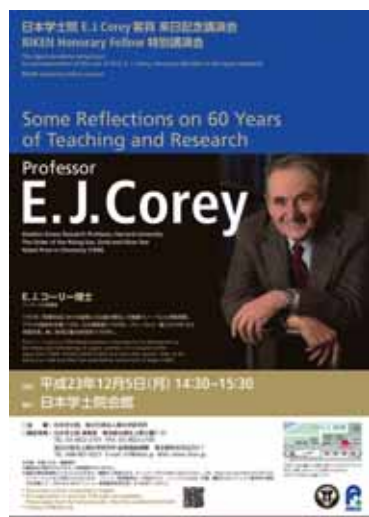
平成23年12月10日(土)午後2時～

日本学士院学びのススメシリーズの講演会は、平成20年に第1回を開催し、今回で第4回となります。本講演会は、様々な分野で素晴らしい研究を重ねてきた日本学士院会員が、将来の日本の担い手となる子どもたちに学ぶことの楽しみを知ってもらう一助になればという思いから企画されました。

### 「見えない巨人ー微生物ー」

日本学士院会員 別府輝彦

目に見えない微生物は、発酵食品から医薬までさまざまな役に立つ物質を作り出し、また我々の身の回りの環境に絶えず貯まりつづける汚染物質を分解・浄化してくれる一方で、その一部は病気や腐敗を起こすのでそれをどう防ぐかが大きな問題になります。人間生活に深い関係をもっている微生物ですが、実はそれが地球上に生息している動物、植物を含む全ての生物の中で最大の部分を占めているということは、21世紀になってようやく分かり始めたばかりの新しい事実です。このような微生物の多様で意外な姿を紹介すると同時に、この巨人とどう付き合うかについて「共生」という見方から皆で考えたいと思います。



## (会員寄稿)「攘夷論」の核心としての「独立の精神」

去る2011年5月28日に松山大学で開催された日本学士院公開講演会において、私は「再考・維新経済史—国家・商人・民衆—」と題して、幕末の日本に加えられた欧米列強の外圧にいかに対応すべきかを巡って、日本人が「攘夷論」と「開国論」に分れて争った話をした。話のポイントは「攘夷論」の再評価である。『福翁自伝』を読むと、適塾の緒方洪庵の通夜に出席した福澤諭吉が、先輩塾頭の村田蔵六(大村益次郎)に向かって、下関での外国船砲撃について「馬関ではたいへんなことをやったじゃないか。何をするのか気狂いどもが、あきれ返った話じゃないか」「この世の中に攘夷なんてまるで気違い沙汰じゃないか」と言うと、村田から「気違いとはなんだ、けしからんことをいうな」と怒鳴り返され、びっくりした話が出て来る。福澤とすれば、同じ洋学者仲間の村田が、まさか攘夷を主張するとは信じられなかったのであろう。

歴史研究においても「攘夷論」は評判が悪い。中国を代表する日本史家呂和氏の『明治維新と中国』(六興出版、1988年)は、1720年に、清朝の康熙帝が禁教令を下して洋学禁止の流れを作ったのに対して、八代将軍徳川吉宗はキリスト教関係以外の洋書の輸入禁止を解除したことが、その後の両国の近代化の分岐点となったとし、明治維新の成功は攘夷論を克服したためで、福澤らの啓蒙思想の役割がきわめて大きいと論じた。私は、ある雑誌の座談会で、そういう見方を批判して「攘夷論」の役割を高く評価したところ、維新史の専門研究者から、尊王攘夷運動は破壊工作に過ぎないと厳しく反論された。

もちろん、私としても、攘夷を主張する志士たちが外国人を無差別に殺害した行動を肯定している訳ではない。しかし、なぜ「攘夷論」が幕末の多くの日本人の心を捉えたのかという問題を考えてみると、尊王攘夷運動があれば幕藩体制を揺るがす巨大なエネルギーを発揮した理由を理解できないと思う。そこ

で、無差別テロ活動から外国人への経済的対抗までさまざまな形をとる攘夷行動の中にある一番大事な思想を、玉ねぎの皮を剥くように探し求めていくと、最後の核心のところで「独立の精神」に突き当たるような気がするのである。近代化の重要性を説く「開国論」も大事だが、独立の精神を説く「攘夷論」もまた大事であり、問題はそれらを統合する高次の論理の発見にあった。

徳川幕府の存続でなく日本の独立をこそ守ろうとした幕臣勝海舟は、もっとも良質な「攘夷論」の持ち主であり、攘夷をするためには開国して軍事力・経済力を近代化しなければならないという、いわば「攘夷のための開国論」を主張した。それに対して、「開国論」を主張する福澤が、第二次征長の役で大村の率いる長州軍に敗れた幕府軍のためにフランスの軍事力を借りるべきだという建白を幕府に対して行ったのは、当時の福澤の「開国論」が、「攘夷ぬきの開国論」であり、日本の独立を犠牲にしても幕府を支えようとするものだったことを意味している。勝と福澤の場合、幕末において「日本の独立」を求める攘夷のために苦勞した経験の有無が、日清戦争にさいしての「朝鮮の独立」への配慮の有無を規定し、勝の戦争反対論と福澤の戦争賛成論の違いを生んだように思えてならない。



石井 寛治 会員  
(第1部第3分科)

昭和13年、東京都生まれ

東京大学卒業。東京大学経済学部助教授、教授を経て、平成6年東京大学経済学部長。平成10年東京経済大学経営学部教授。  
東京大学名誉教授。

平成21年12月から日本学士院会員

### 福澤諭吉(1835-1901)



福澤諭吉は、豊前國中津藩(現、大分県中津市)の生まれで、江戸時代後期から明治の武士、蘭学者、著述家、啓蒙思想家、教育者である。

慶應義塾の創始者であり、専修学校(のちの専修大学)、商法講習所(のちの一橋大学)、伝染病研究所の創設などにも尽力した。

1873年、西周・森有禮・加藤弘之・中村正直・津田真道・箕作秋坪・杉亨二らとともに「明六社」を結成。その後、1879年、東京学士会院を創設。東京学士会院では、初代会長を務めた。

## 外国アカデミー等との交流

ロンドン王立協会を始め、10カ国11機関と交流協定を結び相互訪問等を実施するほか、海外の学術団体等との学術交流を促進しています。

| 区分・相手先 |                        | 会 員 等 氏 名                                                   | 期 間          |
|--------|------------------------|-------------------------------------------------------------|--------------|
| 派遣     | 国際学士院連合第85回総会(ブリュッセル)  | 青柳正規 会員                                                     | 23.5.6～5.12  |
|        | ラテン語用例辞典国際編集委員会(ミュンヘン) | 大芝芳弘 教授(首都大学東京)                                             | 23.6.30～7.7  |
|        | 第6回日韓学術フォーラム(ソウル)      | 久保正彰院長、古在由秀部長、伊藤 誠、上田誠也、斯波義信、東野治之、中西重忠、廣川信隆、尾藤正英、山川民夫 以上各会員 | 23.9.27～9.29 |

## リンチェイ・アカデミーとの学術交流協定締結

平成23年5月12日、本院はイタリアのリンチェイ・アカデミーとの学術協力を行うため交流協定を締結しました。

### リンチェイ・アカデミー(Accademia (Nazionale) dei Lincei)

このアカデミーは、1603年、貴族のフェデリコ・チェシが学術探求の書面に他の仲間3人と署名したことがきっかけとなり、イタリア・ローマに設立された団体をその起源とする。若い4人はガリレオの講義や実験からも刺激を受け、科学の不思議さをオオヤマノコ(リンチェイ)のように鋭い感覚をもってはつきりと知りたいと願いアカデミーの名称とした。リンチェイ・アカデミーは自然科学分野と人文・社会科学分野の2部に分かれて会員を擁し、それぞれ90名のイタリア人会員、通信会員、外国人会員がいる。ガリレオ・ガリレイが会員であったことで知られる。

## 会館施設の利用案内

建築家谷口吉郎氏の設計による現在の日本学士院会館は、日本を代表する碩学の府にふさわしい荘厳かつ気品と機能性を備えた建物となっています。館内には、議場のほか大小六つの会議室等があります。

本施設をご利用になりたい方は、庶務係までお問い合わせください。

(平成23年4月以降の会館利用状況)

| 利用年月日       | 利 用 目 的 ・ 内 容   |
|-------------|-----------------|
| 平成23年 9月 2日 | 「エリザベス朝演劇研究会」例会 |
| 平成23年10月29日 | 第4回加藤山崎教育基金贈呈式  |
| 平成23年11月18日 | 第11回山崎貞一賞贈呈式    |



日本学士院会館議場



## 会員の逝去

平成23年4月以降、以下の方々が逝去されました。

### <会 員>

築島 裕 会員 (第1分科)

平成23年4月11日

享年85歳

細谷千博 会員 (第2分科)

平成23年9月21日

享年91歳



### シンボルマークの由来

『古事記』において「長鳴鳥(ながなきどり)」は、知恵の神である思金神(おもいかね)が天の岩屋戸を開くために鳴かせたと記され、黎明を告げる鳥として伝えられています。本院の恩賜賞(当時)と帝国学士院賞(現日本学士院賞)の賞牌をデザインした坪井正五郎会員は、長鳴鳥に自然界の物の性質を考え究め事に応じて用いるとの意を込め図案に用いました。それ故、本院では長鳴鳥をシンボルマークとしています。

## 会員の著書紹介

- ・河本一郎(他共著)『日本の会社法 新訂第10版』商事法務、2011年1月
- ・益川敏英他著『「大発見」の思考法 iPS細胞vs. 素粒子』文春新書、2011年1月
- ・速水 融編『歴史のなかの江戸時代』藤原書店、2011年3月
- ・野依良治『事実は真実の敵なり 私の履歴書』日本経済新聞出版社、2011年4月
- ・富永健一『社会学わが生涯(シリーズ「自伝」my life my world)』ミネルヴァ書房、2011年5月
- ・広中平祐『生きること 学ぶこと』集英社文庫、2011年5月
- ・塩野 宏『行政法概念の諸相』有斐閣、2011年6月
- ・大沢 文夫『大沢流手づくり統計力学』名古屋大学出版会、2011年8月
- ・秋山 虔『平安文学の論 AKIYAMA KEN Selection』笠間書院、2011年8月

## 編集後記

今回発行しました第8号のニュースレターでは、第101回の日本学士院賞授賞式のほか、公開講演会や日韓学術フォーラムの様子などをお伝えします。ご寄稿いただきました先生方や会員の皆様には心より御礼申し上げます。

さて、今年の夏は、震災の影響による電力不足のため、特に東北・関東地方において15%の節電が求められました。各事業所や公共機関、交通機関等においてエアコンの設定温度を上げるなどの対策を取ったため、例年と比べても、より猛暑を感じる夏でした。

そんな中、「なでしこジャパン」のプレーは、多くの国民に活力を与えてくれた素晴らしい活躍でした。

6月末よりドイツで開催された2011・FIFA女子ワールドカップでは、決勝トーナメント進出を決め、これまで1度も勝利できなかった強豪アメリカとの決勝戦では、終始アメリカの猛攻にさらされるも延長戦に持ち込み、先行された延長も残り4分、澤穂希選手の同点弾で2-

2とし、PK戦の末、歓喜の初勝利を得ました。男女、年齢別代表を通じ、日本代表としては初のFIFA主催の世界大会優勝という快挙を成し遂げました。

また、大会中、チームは試合後に同年3月11日に発生した東日本大震災に対する世界からの支援へ感謝を表す横断幕をかがけ、会場の大きな拍手を受けました。

このような「なでしこジャパン」の活躍は、ややもすれば沈みがちだった被災地の方々も含め、日本全体にとって夢と希望を与える良いニュースでした。

よく日本人は「熱しやすく冷めやすい」と言われますが、国際的に活躍した選手やスポーツに対して、一時的なブームに終わらせるのではなく、今後の地道な支援につながっていけば良いのになあ、と感じました。

最後に、福島原発が早期に収束することと、東北各県の被災地が少しでも早く復興することを願ってやみません。

(A)

### ◎お問い合わせ先

#### 日本学士院

〒110-0007

東京都台東区上野公園7-32

電話: (03)3822-2101

FAX: (03)3822-2105

E-mail: jimu@japan-acad.go.jp

第8号:発行日:2011. 10. 1  
(年2回 4月、10月発行)

ホームページもご覧ください。  
<http://www.japan-acad.go.jp/>